



はあもにい

～聴こえにくさや、
発音のしにくさのある人と学びあう～

2019年3月31日(日)発行

第5号

作成者：



紗音の使い方（その1）

「はあもにい」で公開しているサ行学習ソフト、紗音。動きはとてもシンプルで、摩擦音を検知して、青いバーが動く仕組みです。この「単純さ」と「再現性」（必ず同じ動きをする）が、担当者子どもがやりとりしながら学ぶために、とても素晴らしいツールとなっています。

例えば、サ・ス・セ・ソの子音sを学習する段階の子どもに、私は次のように使っています。以下のやりとりは、実践例を元にした、架空のやりとりです。

私：「今日から、これ（sの発音記号を示す）の勉強をします。ちょっと見ていてね。s：（紗音が動くことを示す）」

子ども：「Φ：（フの子音になる。紗音は動かない。子どもが不思議そうな顔をする）」

私：「（子どもの表情に合わせて、不思議そうな顔をして）あら？もう一回やってみましょう。s：（紗音が動く）」

子ども：「Φ：（紗音が動かない）。どうして？」

私：「（不思議そうな顔をして）どうしてかしらね…。（紗音に目線を動かし、子どもの目線を誘導してから）s：」

子ども：「Φ：（紗音が動かない） なんでかな」

私：「（心から不思議そうな顔をして）おかしいね…。s：s：（紗音が動く）。Aさん、発音するときに、息はどこに当たっていますか？」

子ども：「Φ：Φ：口に当たる」

私：「s：s：。ああ、なるほど。先生はね、舌の先が下の歯につくくらいまで出して（歯列模型と、スポンジの舌で位置を示す）、舌の先に息が当たっていますよ。s：」

子ども：「Φ：Φ：s：（紗音が動く）動いた」

私：「動きましたね！（子どもと手をとって喜び合う）」

子ども：「s：s：（紗音を見ながら繰り返す）」

このやりとり、かなり「省略」して書いています。実際にはもっと段階を踏む必要があることがほとんどです。また、発音学習中いつも紗音をオンにしておき、他の音を学習しているときにも、偶然摩擦音が出たら、即強化していくことがほとんどです。このように「今日からサ行！」と、音の要領から獲得させていくことは、私の場合には稀なことが多いです。

紗音の使い方、何よりも大切なことは、このやりとりの中で、一度も私が「違う」と言わずにすむということです。子どもにとって、何がよくできているのか分からない段階のときに、大人から一方的に「違う」と言われるのはとても嫌なことです。不思議ですが、パソコンに反応されると怒ることなく、納得して取り組むことができます。担当者としては、正誤の判断は紗音にまかせて、子どもと一緒に「紗音が動かないこと」を不思議がったり、「動いたこと」を喜びあったりすることが、最大のポイントになります。



はあもにい

～聴こえにくさや、
発音のしにくさのある人と学びあう～

2019年4月7日(日)発行
第6号
作成者：木村淳子



紗音の使い方（その2）

前回は、サ行の子音の要領をつかませるための紗音の使い方のポイントについて書きました。今回は、サ行の子音が言えるようになった段階、あるいは最初から子音は言えている段階の子どもに対しての使い方です。今回も、実践に基づいた架空のやりとりでお送りします。

私：「今日から、サシスセソの練習をします。まず、『ス』って、どうやっていいますか。」

子ども「(ス、ス、と言ってから)ウの口の形で、息を出す」

私：「ウの口の形で息を出すの。どんな息を出しますか？」

子ども：(困った顔をする)

私：「(しばらく待ってから)確かめてみましょうか。(左手のひらを、指を広げて顔の前に立てて。図1参照)ス、ス」



図1 手のひらを口の前に立てる

*指を広げるのは、口形が隠れないようにするためです。

子ども：「(真似をして手のひらを顔の前に立てて)ス、ス。冷たい息。」

*子どもによって、このときの回答は異なります。

私：「なるほど。この息は、どうやって作りますか？」

子ども：(困った顔をする)

私：「(しばらく待ってから、歯列模型とスポンジの舌を取り出す。図2参照)



図2 歯列模型

舌は上(上顎)につきますか?つきませんか?」

子ども：「(ス、スと言って確かめてから)つかない」

*子どもによっては、「上顎につく」と主張する場合があります。そのときには、担当者が上顎に舌をつけて「ス」を言おうとしてみせ、「ス」が言えないことを示します。

私：「舌は上につかないんですね。そして、息はどこに当たりますか？」

(スポンジの舌を指しながら)舌の前?後ろ?」

子ども：「(ス、スと言って確かめてから)前。」

私：「なるほど。ところで(紗音に視線を向ける)、『ス』と言ったときに、気がついたことはありますか?」

子ども：「(ス、ス、と言ってから)これ(紗音を指さす)が青くなる」

私：「(驚いた顔をして)本当?」

子ども：(ス、スと言って、紗音が青くなることを示す)

私：「(感心した顔をして)本当ですね。ところで、この機械(紗音)は、どんなときに青くなるか知っていますか…」(以下略)

「発音ができる」と、「発音の仕方が分かる」ことは別ものです。多くの健聴者が力行やザ行の発音の仕方を説明できないのと同様に、発音できている難聴のある子どもが、その音の言い方を意識しているわけではありません。「発音できる音」の意識化をさせていくことは、口形意識を育て、その子どもにとっての難発音の指導の基礎になる、大事な活動だと考えています。発音を意識させるために、紗音が重要な役割を果たしてくれています。

通常、この活動の後に、「サ行は息を擦る音」(摩擦音)を押さえます。この活動の展開例については、次号に続きます!